

スペシャル講座 「作家・芹沢光治良が残したもの」 資料（抜粋）

安井正二

本資料は、絵手紙の皆様にご紹介した講演資料です。

- ①大阪（平成一五年六月）二日間で七十名様の参加
- ②東京（平成一五年七月）八〇名様の参加

「資料内容」

- 一 作家・芹沢光治良の紹介
- 二 代表作 「巴里に死す」について
- 三 大河小説「人間の運命」について
- 四 芹沢光治良先生との出会い
- 五 芹沢文学と絵手紙
- 六 芹沢光治良が出会った人々
- 七 まとめ

☆芹沢光治良（一八九六～一九九三）

静岡県沼津市に生まれる。東大経済学部卒、農商務省に勤務、パリのソルボンヌ大学に留学、留学中に肺結核で倒れる。スイスで療養後帰国、作家生活に入る。代表作「巴里に死す」「人間の運命」「神の微笑」など、日本ペンクラブ会長、ノーベル文学賞推薦委員を歴任。

「芹沢光治良の本」(例)

- 「巴里に死す」
- 「人間の運命」 全十四巻
- 「こころの窓」
- 「神の微笑」など神シリーズ全八冊
- 「新潮日本文学アルバム・芹沢光治良」
- 「芹沢光治良文学館」全十二巻

以上の出版社は全て新潮社

芹沢光治良についての参考資料

- 雑誌「国文学・解釈と鑑賞」特集・芹沢光治良の世界（至文堂）平成九年九月
- 雑誌「国文学・解釈と鑑賞」特集・芹沢光治良（至文堂）平成十五年三月
- 柳原浩 「文学館探索」芹沢光治良文学館（新潮社・新潮選書）平成九年九月

(1) 芹沢光治良の言葉メモ

・文学というものは、それを読んだからといって、直ぐに役立つものではないですね。しかし、私たちは一生の間に、必ず大きな悲しみ、苦しみに出会うことでしょう。そういうときに、自分自身を支える力となり、励ましを得ることでしょう。文学はそうした態度、心を自分では気が付かないうちに養ってくれます。

・あなたに与えられた、今の仕事を、喜んでお続けになるといいですね。

・よく耐えて時の力を待つべし　かくヴァレリーはわれにさとしき

(ヴァレリー・フランスの詩人(一八七一〜一九四五))

・指導を受けられる皆さんは、あなたがおかきになる、手元をみてるかもしれないが、あなたの後ろ(背後)を見ていますよ。

・パリで初めて藤田嗣治さんにお会いしたとき、藤田さんは「パリで成功する道は一つだよ。書いて、かいて、かきまくる、これしかないよ。一日に、三時間か四時間、といっても、これは仕事の時間じゃなくて、眠る時間」。「パリにまで来て、毎日、七時間も八時間も睡眠時間をとっているようでは、とてもとても、エコール・ド・パリに通る画家にはなれっこないよ」「もう一つ、これは心がけの問題だけれど、パリに住むからには、パリ人が驚くものだけに驚いて、そのほかのことには平気でいられるようにならないとね」

・ご家庭の主婦の方は「家庭の太陽です」。曇ってますと家庭が曇ります。ぐち、不平、不満があったら、朝窓を開け、太陽に向かって、声を出して言いなさい。聞き届けられますよ。大洋だからいつも輝いていなさい。

・芸事というのは、昔から、日本のご婦人が、日常性の中から自分の時間をつくって、生きがいを感じたのだと思います。自分の時間を持つようにしましょう。

(2) 芹沢光治良著 「巴里に死す」のあらすじ

妻をともない、パリへ留学する医師の宮村には、結婚前に愛し合いながら別れねばならなかった青木鞠子という恋人があった。

宮村とパリへ向かう妻の伸子の心には、いつも鞠子の影が差し、信子は苦しめられるのであった。鞠子から宮村宛に届いた古い手紙を信子は読み、自分とは違う新しい女性像を発見した。

「父があなたとの結婚を許さないのは、あなたに欠点があるのではありません。私たちが愛しあったということが、父の心情に逆らったのだと思います」

「愛するということが、父の時代の人には、みだらなことに感じられているのではないでしょうか。父は惚れると言う言葉しか知らないのです」

「愛すると言うことが、お互いに精神的な精進をして、完全な人間となつて、運命をもにするものだと言うような、必死な努力であることを父は知らないのです」

鞠子の手紙を読んだ伸子は、この時をを境にして古い日本の女から脱皮をはかりたいと思った。やがて伸子は妊娠した。

このときの伸子は、二つのことに気付いた。

一つは、自然の力に感謝と喜びがあることを知った。この自然の力に神があると
と思った。もう一つは、お産をしたことで、新しい自分になろうと心に誓った。

やがて産れた子どもに伸子は万里子と命名した。伸子の心には、自分で果たせな
かったものを、娘に託したいとの願いが込められていた。わが子の誕生後、伸子は
宮村の妻として幸せな日々であった。伸子は、愛情というものが自然に発生するの
ではなく、創るものだということを発見した。

母と子の愛情さえ、苦しんで創つてなるものであるものを、まして、夫婦の愛は
生涯精進して最後に授けられるものであるとうことに気づいた。

結婚は、愛の終わりではなくて、家庭愛という傑作をつくるための、出発であった
とも気づいた。このとき伸子は、自分が結核におかされていることを知った。結核
であつて出産することは、伸子の死をも意味した。

伸子は出産後、愛児の万里子をパリに残して、一人スイスの療養所へと向かった。
ある朝、伸子は喀痰が赤くなっているのに気づいた。



△入選▽
『人間の運命』を読んで
芹沢光治良氏と出会う

東レ労組名古屋支部 安井正二

と、目の前の光景が作品の中の世界と重なり合っていた。

明治の末年、幼い森次郎が落葉かきをした牛臥山にも登ってみた。富士山が遠くに見える我入道海岸の砂浜も歩いた。風の音、波の音とともに、森次郎のことばが聞こえてきた。

「どんな逆境に置かれようと、希望を持ちつつげなさい」

「辛いとき、苦しいとき、逃げ出さないう耐えることです。時の力が解決してくれませう」

「出会いを大切にしなさい。それが幸福の第一課ですよ」

芹沢文学館を訪ねたとき五歳だった長女が今年の春高校生となった。彼女が私の書棚に置かれている『人間の運命』に心の目を向け、親子で読み合える日も、そう遠くはないはずである。

いつか再び一家で沼津を訪ね、芹沢文学館、森次郎の故郷を歩いてみたいと思っている。

昭和四十八年初夏、私は幼い三人の子供

を連れて、一家で沼津市我入道にある芹沢

光治良文学館を訪ねた。そのとき、文学館

の前で作家の芹沢光治良氏と、一緒に写真

真を撮らせていただいた。芹沢氏の横に、

私の妻が八カ月の長男を抱いて立ち、私の

前には五歳の長女と、四歳の次女がやや下

を向いて立っている。おじいちゃんと一緒に

撮った家族写真のようにも見える。

私が芹沢光治良著『人間の運命』に出会

ったのは十五年ほど前である。

やさしい文章で淡々と書かれているにもか

かわらず、いつしか私はこの本に心を奪

われた。

芹沢光治良氏が八年間かかって書きあげ

た大河小説『人間の運命』は、明治、大

正、昭和の三代にわたって、日本人の歩

んだ足跡が描かれている。

社内の図書室を利用して『人間の運命』

を読み終えたとき、私は大きな感動に包ま

れ、しばらくの間他の本を手にすることが

できなかった。

いつの日か、主人公の森次郎が生まれ育

った故郷の沼津へ訪ねてみたいと思うよう

になった。

その後、芹沢光治良氏が幼年時代を過ご

した沼津市牛臥山の麓に芹沢文学館が建て

られたことを知った。この地はまた『人間の

運命』の主人公森次郎の故郷でもあった。

書店で買い求めた沼津市の地図を頼りに、

三人の子供を連れて、一家五人ではじ

めて訪れた沼津市内はいたるところに、作

品の中にあつた地名、川、橋、山なみが、

走るバスの中から眺められた。目を閉じる